



青年期における親子間葛藤に関する研究の再検討 : 世代性の視点と社会・文化的視点の必要性

須崎, 暁世

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8(2):57-66

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008825>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008825>



青年期における親子間葛藤に関する研究の再検討

－世代性の視点と社会・文化的視点の必要性－

Reexamination of the studies on parent-child conflict relationship in adolescence

－ Necessity of generativity and socio-cultural viewpoints －

須崎 暁世*

Akiyo SUZAKI*

要約：青年期の自立に伴う親子間の葛藤については、「第二反抗期」と説明されることが多い。しかし、心理学においては、「第二反抗期」という言葉は近年あまり用いられなくなった。本論文では、「第二反抗期」や青年期の親子の葛藤がどのように扱われてきたのかについて、90年代以降の動向も踏まえ、論じる。ライフサイクル、とくに世代性の観点から検討を行い、親子関係の再構築という課題の中で現代における反抗期研究の意味を明確にする。そのうえで以下の3点について先行研究のレビューを踏まえ、論じる。

①青年期の親子間葛藤の再検討を通して、親子関係の再構築を支える肯定的要因について検討する。従来の研究で親子関係の分離の側面が強調される傾向にあり、再構築への注目が少なかった。再構築の側面に焦点を当て、再構築をスムーズにする肯定的要因について考察する。

②生涯発達の視点から見た親との葛藤の意味。平均寿命の伸長に伴い、親子関係は生涯続くものとの認識が高まった。近年注目されるようになった中年期の親世代が抱える二つの世代性を中心に生涯発達の中での、親子の葛藤を検討する。

③近年の青年期の研究の傾向と、社会はどのように親子関係をとらえてきたかについて、社会・文化的視点を踏まえたうえで研究の方向性を提示する。

はじめに

青年期の自立に伴う親子間の葛藤については「第二反抗期」の反抗という形で説明されることが多い。しかし、心理学においては、反抗ではなく「葛藤（コンフリクト）」と表現されることもある。両者の区別についてはあいまいな点もあり、混在している面も否定できない。また、反抗という言葉はやや厳しい印象を受ける言葉でもある。青年期における親子間の対立や葛藤について、どこまでが反抗なのかの定義は難しい面もある。須崎（2009, 2011）における調査協力者からも反抗という言葉に戸惑いを感じる人も見られた。また、「反抗はしなかったが、親と対立したり、日常的な喧嘩はあった」と述べる協力者もあり、調査者も協力者も、反抗という言葉の取り扱いに戸惑わざるを得ない側面があった。「第二反抗期」という言葉は、調査協力者も知っていた。しかし「イメージにある第二反抗期の反抗と自分の反抗を比べると違う」というインタビュー結果が見られたように、従来の「第二反抗期」ではとらえられない青年期の親子関係が、須崎（2009, 2011）を通して浮き彫りになった。

日本では、青年期、特に中学生や高校生が親に反抗的な態度を取る「第二反抗期」は広く知られ、それが存在することが自明の事のように考えられている面もある。しかし、心理学においては必ずしも現在、そのような見方ばかりではない。平石（2000）は親―青年関係の特質に関する研究が、分離や独立などを強調する視点と青年の両親間の結びつきを強調する視点に大別されていると述べている。このような状況の中で、「第二反抗期」は、青年期において古くて新しい問題ともいえる。2013年の日本発達心理学会第24回大会における自主シンポジウム「思春期の親子関係―第2反抗期再考―」においても、「第二反抗期」の反抗が生じてくるメカニズムが一般に理解されているほど単純ではなく、様々な観点からの理解が必要であるという問題提起がなされた。

また、「第二反抗期」という言葉で表現された場合は、その時期は限定される。一方、自立に伴う親子の葛藤、あるいは葛藤を経たうでの親子関係の変化という場合には、青年期に限定されるものなのかという問題がある。近年、成人期研究が盛んになり、その中で、親子関係の変化についても研究がなされるようになった。また、平均寿命の伸長、少子高齢化などの社会的要因もあり、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

（2014年9月30日 受付）
（2014年11月27日 受理）

親子関係は青年期の自立を持って一区切りがつく問題ではなくなっている。社会的にもその傾向がみられる。2014年4月時点の『朝日新聞』の記事検索(雑誌も含む)において「親子関係」で検索した結果、2006年以降、親子の確執の特集記事で介護の問題が取り上げられることが増加した。こうした結果は、親子関係が一生の問題、人は親として子どもを育てる同時に子どもとして親を介護し最後をみとるという2つの世代性について社会が注目し始めたことを示している。親子関係が人生の中で続く問題として考えられる場面も増えた。その結果、親子間の葛藤は青年期に限らず、親子関係が変化した成人期以降も存在し、変化していく可能性もあることが示唆された。その中で、自立のための反抗や葛藤はどのような意味を持っているのだろうか。

本論文では、「第二反抗期」という親子間の葛藤が心理学の中でどのように捉えられてきたのか、また、社会状況が変化し、家族関係が多様化していく現在の日本で、青年期の親子の葛藤が持つ意味は何なのかについて、生涯発達の見点の下、社会・文化的背景を踏まえて、先行研究を整理したうえで問い直す。ライフサイクルとくに世代性の観点から検討を行い、親子関係の再構築という課題の中で現代における反抗期研究の意味を明確にし、検討する。

1. 「第二反抗期」解釈の再検討

青年期の反抗という言葉の取り扱いに関する混乱の背景には何があるのだろうか。心理学の研究について、2014年6月、CiNiiで検索を行った。「第二反抗期」で検索した場合、12件。「反抗」で検索した場合、49件だが、1960～70年代の論文は学生運動などの社会的背景もあり、社会への抵抗・反抗について書かれたものも含まれている。「青年 葛藤」で検索した場合、約140件であり、特に人間関係での葛藤については親子関係の葛藤についてのものも多く含まれている。また、「青年 親子関係」の検索の場合も140件以上あり、この場合は親子間の葛藤だけではなく、変化や成長について書かれたものも多い。この結果から考えると、「第二反抗期」に焦点を絞り、学術的に研究することは難しいのではないかという印象を受ける。2013年刊行の『発達心理学辞典』では第一反抗期の項目は存在するが、「第二反抗期」の項目は存在せず、思春期という項目の中で「反抗期」という用語が用いられているのみである。では青年期の反抗と親子の葛藤はどのように扱われてきたのだろうか。

1991年刊行の『発達心理学用語辞典』によると、反抗とは社会的関係において下位にあるものが、上位になるものに対する服従を拒絶する行動であると定義づけられ、人の発達過程には、このような反抗的な態度が顕著にみられる時期が存在し、この時期を反抗期と呼ぶと定義づけられている。特に「第二反抗期」は、いわゆる思春期に現れる。この時期は、自我が急速に成長し、独立した一つの人格が確立されようとする時期であり、身体面での独立・自立欲求を主とした第一反抗期とは異なり、精神面での独立・自立欲求が高まってくる。そのため、親や年長者に対する反抗だけにとどまらず、社会的な権威、制度、通念など、抽象度の高い対象に対しても反抗的な態度が表れると述べられている。

「第二反抗期」という言葉について、吉田(1993)は、ブーゼマンが「反抗期」という言葉を用いたことを指摘している。ブロス(Blos, P., 1962)は、青年期は第二の分離個体化期であるとして、性的衝動の表れが、親からの自立を求めるしるしとなり、愛着の対象の親から恋人への移行をもたらすとした。そのため、第二次性徴の発現が生物学的必然である以上、そこから始まる「第二反抗期」も生物学的必然とされた。日本では、乾(1977)が「第二反抗期は生物学的必然ではないけれども、やはり何らかの意味で通過しなければならない正常な発達の一つの節」と述べたことに象徴されるように、「第二反抗期」を親からの分離と自立に伴う必然的な過程だと考えてきた。このような心理学の流れは、松井(1996)が述べたように青年が親への依存を断ち切り、心理的な自立を遂げる姿を強調しているといえる。基本的に、「第二反抗期」とは青年にとっては自立のための親離れをするために必要と考えられてきたと言える。

一方で、反抗という言葉を用いずに、自立に伴う青年期の親子の葛藤(コンフリクト)と表現される場合もある。前述の『発達心理学用語辞典』によると、葛藤とは、2つ以上の互いに対立する欲求が同時に生じ、その欲求の強さがほぼ等しい時、どちらを選ぶべきか決定しかねて、緊張した状態と定義されている。青年期の自立の葛藤について、加藤(1987)は、青年は親からの自立を主張しながらも、その反面、親や教師に突き放されると、自分はまだ独り立ちできる水準に達していないことを悟らざるを得ず、自由と独立を主張しながら甘えと依存を断ち切れないと述べている。「第二反抗期」の反抗も、依存と自立の欲求から生じてくると言われ、そのため、「第二反抗期」は広義には、親子間の葛藤の一時期とも考えられる。

小高(2000)が、12～15歳ごろになると、青年は自己に強く関心を向けるようになり、自律性の欲求が高まり、この時期、親との間でコンフリクトを生じやすくなる、これがいわゆる「第二反抗期」であると述べている。このように、反抗と葛藤はあまり厳密には区分されず、「第二反抗期」とは青年期において、自立のために親との間に葛藤が生じる時期であり、その間に親に対する反抗も見られると受け取られている。また、親に対する反抗によって親子の葛藤が生まれくる、あるいは、葛藤によって反抗に至るとも考えられる。

しかしこの分野について研究する際には、葛藤と反抗が混在して使われると、「強い葛藤はないが、反抗的態度に出ているとき(親へのやつあたりなど)」あるいは逆に、「葛藤はあるが、反抗的な行動には出ていない時」をどう取り扱うのかという問題が生じてくる。

葛藤が心理的、内面的なものに対し、反抗は表に出てきて、何らかの行動が見られるという見解もあるかもしれない。しかし反抗の形態はさまざまである。住田(1995)は“反抗の表現形態はさまざまであり、反論、口論、嘘、不平不満といった言語的反抗もあれば、黙殺、冷眼、不機嫌といった非言語的反抗もあり、また癡癡や破壊的行動といった行動的反抗もある。反抗の程度も個々の子どもによって異なり、行動的反抗のようにあからさまな反抗もあれば、心の中での抵抗と言ったような内面的反抗もある”と述べている。反抗形態について、小沢(1998)は親への反抗形

態を6つのカテゴリーに分類した。しかしこれは目に見える形での反抗の分類であり、住田（1995）が触れた「心の中での抵抗と言ったような内面的な反抗」については捉えられない。そして、「内面的な反抗」は葛藤とどう違うのか、あるいは反抗の中でも軽度のもは「反抗」と言えるのか、反抗対象である親さえ、反抗とは気づかない場合はどう考えるのかという課題が存在するだろう。

2. 青年期の親子関係間葛藤研究の再検討

青年期の親子関係の特徴について、宮下（1996）は、児童期までの安定した親子関係は、第二反抗期の到来により一気に押しつぶされ、そこには、児童期までの互いに信頼を寄せ愛情に満ち溢れた人間関係は、もはや表面上ほとんど見当たらなくなってしまうと指摘している。宮下（1996）は、これを、青年の「自我の発見」とそれに続く「自立」へのプロセスの中で必然的に生じてくるものであるとし、第二反抗期に突入すると温かい親子関係は一時的に姿を消し、青年の心の中にはもっぱら親に対する否定的な感情が去来することになると述べている。

加藤（1987）は青年期の自立の過程での、親との対立葛藤から回復への過程を大学生の手記と質問紙によって調査した。その結果から、加藤（1987）は、青年はそれまでの偶像的な父親像、母親像が崩れ落ちるのを経験するのが普通であり、この時には誰でも両親に不満を感じ、両親との距離を置くようになると述べている。とりわけ青年期前期には理想的な親のあり方を求めて現実の親を批判するようになる。欠点は欠点として、人間としての親全体を受容できるようになるまでは時間がかかるが、おおむね青年期後期になると親を人間として見るができるようになり、欠点を持った親を受容することができ、親子関係は回復するとされている。

では、青年期の親子関係は心理学の中でどのような見方がなされてきたのだろうか。一般的に青年期は、第二次性徴の発現などを特徴とする身体的成熟から、就職や結婚といった社会的成熟までの期間を指してきた。青年期とは本来、「自分は何者か」または「自分に何ができるのか」という自分自身の根源的な問題と向き合っていかなければいけない時期である。このような発達の中で、青年は自我を主張するようになり、特に中学生以降の青年は、親から独立することを求めはじめるとされている。親からの自立は青年期の重要なテーマでもある。この親からの自立については、親への依存性を断ち、親を自分とは異なる一人の人間として認識し、親の理想化から脱し、親から独立することにより、情緒的自立性（Steinberg & Silverberg, 1986）を獲得すること、両親に対する情緒的結びつきから分離することにより個性化（Blos, 1962/1971）することであるという側面がある。

青年期研究においては、青年期危機説と青年期平穏説が存在する。青年期危機説においては、青年期は疾風怒濤の時期であり、動揺の時期であるから、青年期の家族関係、親子関係は混沌と葛藤に満ちているとする考え方が存在してきた。一方で必ずしも青年期の疾風怒濤は必要ではないとする青年期平穏説の立場も存在する。Offer（1969）は、青年期を通過するルートは数多くあり、

「青年期の混乱」はそれらのルートの一つに過ぎないと述べている。

特に近年、混乱や葛藤の少ない親子関係に注目がなされている。小高（2008）は親—青年の葛藤についての研究を概観すると、親—青年の間において葛藤は存在するものの、比較的頻度が少なく穏やかだという報告が多いことを述べ、自身の研究結果からも、現代の親—青年関係は古典的な混乱に満ちた嵐のような関係ではないことがうかがえると述べている。

そうしたなかで新しい親子関係の捉え方も登場してくる。近年では青年の自立に対して家族がサポートティブであれば必ずしも独立と葛藤は伴わないと言われるようになった（Bell & Bell, 1982; Papini & Sebby, 1987）。松井（1996）は、東京都生活文化局が、1985年に中学生・高校生を対象に実施した調査の中で男女ともに「尊敬できる人」や「こんな人になりたい」という相手は同性の親が多く選択されている点、半数以上の青年が親に対して好意的な態度を持っていることに注目した。

松井（1996）は“調査の結果から見ると、多くの青年は、親を尊敬し親のようになりたいと思い、気楽に話して好意を感じており、良好な関係を保っていることが分かる。（中略）データから見る限り、第二反抗期と呼ぶ現象はわずかしは見られない”と結論付けた。松井（1996）は、NHK 世論調査部（1984）の調査における父親に対する尊敬と幸福感の関連についての分析において、父親を尊敬している子どもの方が、幸福感が高かった点などに注目し、青年が親との間に良好な関係を持つことは決して心理的な問題や不適応に結びつくものではないと述べている。少なくとも、世論調査の対象となりうる青年にはこの傾向が現在に至るまで見られる。

また白井（1997）は第二反抗期の二つのモデルを提唱し、第二反抗期は青年の自立に伴って必然的に現れるもので誰にでも見られると考える従来の「分離モデル」に加え、第二反抗期を青年の発達にとって、必然でも必要不可欠なものではないとする「組み替えモデル」を示し、どちらのモデルにも一長一短があり、どちらかのモデルだけで説明することは不十分であるとした。また白井（1997）は1995年に行った「思春期の第二反抗期がどんな風だったかと、それが吹っ切れたきっかけは何か」ということについてのレポートに基づく大学生の親子コンフリクトの回想分析についても記述している。この中で反抗を半数以上のものが体験していたが、体験していなかったものもあり、反抗しなかった学生も適応的に生活している事が判明した。

松井（1996）は日本の青年が親との情緒的つながりを維持しながら成長すること、白井（1997）も青年が自立しても親は愛着の対象であり続けるし、親子の愛着が青年の自立を促す上で重要であることを指摘している。従来は密着した親子関係は自立の妨げになるという見方が強かったが、NHK 世論調査部（2004）は1982～2002年にかけて4回行われた「中学生・高校生の生活と意識」調査に基づき、相談相手として、友人よりも母親を選ぶ回答が増えてきたこと、同時に母親と子供が親密であるほうが青年は将来の仕事に意欲的になり、良好な親子関係にある子供のほうが、「大人になりたい」と思う傾向が強いことを明らかにした。

青年期危機説と平穏説を考察した村瀬（1976）は、“青年期の異

常性、病理性、危機性は決して普遍的なものとはいえない”“青年が精神的に健康あるいは自己実現的であるか、病的もしくは著しく自己実現を阻害されているかどうかは、たぶんに社会的条件に規定されて”いると指摘する。さらに、青年期の危機の程度を規定する諸要因としては、「不安・葛藤・挫折をもたらしやすい内面的・状況的な負の要因群」と「これらを克服する方向に作用する正の要因群」を見だし、これら二方向の力関係が危機のあり方を左右するという見方をとっている。さらに、危機を克服するための条件として、支援的な個人的・社会的条件（ソーシャルサポートや人的・社会的環境）も考慮に入れる必要があると述べている（村瀬，1976）。

特に、現在の日本においては個人・社会的条件が与える重要性は見落とせない。家庭の経済状況、受験などの学業面での要因、友人関係や親以外の他の家族構成員との関係、あるいはその時の社会・経済的な状況も親子関係に影響を与えるだろう。白井（1997）の「思春期の第二反抗期がどんな風だったかと、それが吹っ切れたきっかけは何か」ということについてのレポートに基づく大学生の親子コンフリクトの回想分析や、須崎（2009，2011）においても、「第二反抗期を経験しなかった」と答えた青年の中には、その時の家族や青年が置かれた経済・社会状況が影響を与えていた。

また、親子関係の変化には、青年の側の要因だけではなく、親の心理・社会的要因も影響を与える。遠藤（2000）は、親の夫婦関係、職業、健康などがどのような状態にあるかは、さまざまな連鎖を通して青年に大きな影響を及ぼすこと、この時期、親の経済的負担は大きく、子供を育てるものとして、親は社会的、経済的変動の中をくぐり抜けなければならないことを指摘している。このようなことは、青年期の親子関係の変化に影響を与えると考えられる。また、柴田（2000）は青年の親からの独立には、きわめてアンビバレント（両価的）な感情が伴い、青年の側からみれば、親からの独立を志向すると同時に、これまでの安定した関係を維持したいという欲求も存在し、また親の側からみれば、子の独立を喜ぶ気持ちと、いつまでも自分の手元においておきたいという気持ちが交錯するという両者の葛藤についても指摘している。

さらに、柴田（2000）は過渡期である第二反抗期には親子がお互いの要求をお互いに調整しあうような、新しいコミュニケーション行動が必要であり、親からの独立とは、まさに親と子の関係、さらには家族関係全体の変化を意味すると述べている。しかし、この変化が必ずしもスムーズにいくとは限らない場合も存在する。親にとってはこの時期は子離れの時期だが、子離れができない母親の増加（松元，1996）や親が子を抱えこむ（落合・佐藤，1996）ことで、子の側が葛藤を強めることがある。青年期も後期、成人期初期ともなれば、通常ならば母親と娘は程よい距離感で相互的な関係になっているはずが、この様な母娘関係の歪みから、母親から自由になれないケースについて臨床家や精神科医の多くが指摘している（河野，1995；木村・馬場，1988；齊藤学，2004）。

また、この時期に親自身も子どもの自立を見て、さまざまな思いを抱く可能性もある。Cowan, Cowan, Heming & Miller（1991）は、子供が親になった時に親子関係の変化を経験すること主張しているが、あるものにとっては、それは自身の親との再接近、和解の時期であるが、別のものにとっては昔の緊張状態や家族闘争

の復活に直面する時期でもあるという。しかしこの点については、生涯発達の視点で見ていく必要があるだろう。

このような、社会・文化的視点、生涯発達の視点から見た青年期の親子関係については、次節で詳しく述べる。もう一つ、重要な視点としては、親子関係は葛藤を経ても再構築されているという点である。小沢（1991）は「自立のためには反抗が必要」としながらも反抗が高い群のなかには、今後親から自立し親との良好な関係を維持できる心理的自立に至る以外に、親との関わりを放棄し、自立というより「離反」に至ってしまう可能性もあるとし、心理的離乳というのは大人として親との関係を作り直すということであり、親との関係を切るということではないと指摘している。

しかし、日本では、密着した親子関係は否定的に受け取られ、自立の文脈が強調されすぎる傾向が90年代では特に目立った。関（1996）は、青年にとって親との適切な依存関係の再構築も重要な課題であり、近年はあまりにも親からの自立や分離に重きが置かれている傾向があるという指摘をしている。小高（1998）も、青年が親から信頼され、頼りにされていると認知する状態、また青年自身が親を1人の人間として信頼する状態にあるとき、その青年は親から精神的に独立しているとする。小高（1998）は、親が青年を信頼せず何時までも干渉することは、青年の自立を妨げることになるが、同時に青年が親に対して、反抗し、また1人の人間として親を認知することができないことは、青年の未熟さを表しているのではないかと述べている。

また、木下・島田・保野・網島（1997）は反抗の長期化や両親との不仲が大学生の精神健康に悪影響を及ぼす可能性を指摘している。Noom（1999）によれば、自立は力動的な過程の中で起こる現象と考えられており、その過程には、様々な要因が影響する。特に対人関係は、青年の心理的自立を促したり妨げたりする要因としてその重要性を述べている（Noom，1999）。

では、親子の関係の再構築を支えるものは何だろうか。臨床的には幼少期からの親子の親密な触れ合いや信頼関係があれば、葛藤はあっても断絶には至らず、関係性の再構築に至ると言われている。また、桜井（2000）は親の基本的な関わり方としては、①余計な手助けをしない、②夢や希望を大切にあげ、③人生について子どもと一緒に考える ④親も自分の時間を大切に、楽しむようにするなどが重要だと述べている。また、部活動や趣味など子供が熱中しているものを応援すること（滝沢，2000）や学校での進路指導に関心を持ち、話し合うこと（吉澤，2000）なども指摘されている。須崎（2011）の青年に対するインタビューにおいても、部活動への支援や、受験の際、自分の意思を尊重し、応援してくれたことが、親との関係の回復や、関係性の再構築に肯定的に働いたことが示唆されている。また、親子間の葛藤そのものも、養育態度の影響を受け、子どもに対する肯定的なメッセージや自立・成長を促す姿勢などは葛藤を減少させることが指摘されている（渡邊，2014）

Sullivan & Sullivan（1980）は、自立が単に親から精神的・物理的に離れることではなく、親との関係において愛情・相互交渉・満足感を経験するものがより独立性を増すことを明らかにしている。Sullivan & Sullivan（1980）や安達（2004）は、青年自身の精神的成長を体験する過程において、成長の契機だけではなく、

親との相互作用や自身のやりたいことを探すなどの成長を促進した行動が経験されることを指摘している。

山岸（2009）は心理的・社会的発達が進むと共に親子関係は対等な人間関係のつながりとして再体制化されると考えられていることに触れ、再体制化された親子関係のその後の変化についても研究した。その中で、山岸（2009）は、いくらか問題がありつつも本人の変化や親の対応により問題化することなく、どの時代も良好な関係が持たれているパターンや一時的に親との葛藤があっても、本人と親双方が調節する中で、発達とともに修復されており、成人期には欠点を言いつつも基本的に肯定的な気持ちを向けるパターンが存在することを指摘した。そのうえで、発達が関与する出来事（就職、結婚など）、発達とは直接関係しない本人をめぐる状況の変化、家族にかかわる家庭内外の問題、他者とのかわりの変化（友人関係など）により、母親に対する気持ちが変化することを述べている。

1990年代ごろから思春期・青年期の平穏化について、90年代に起こった様々な事件をきっかけにメディアも注目し始めた。その中で「反抗が必要にもかかわらず平穏化した青年期」が問題とされるようになっていった。また、「パラサイト・シングル」「引きこもり」などが取り上げられ、「自立しない青年」に注目が集まった。そのような社会情勢の中で「自立」が強調されることで、「第二反抗期」に代表される親離れが、親から離れるところにばかり注目が集まり、その後の親子関係の結びなおし、特にどのような要因が親との関係の断絶に至らず、結びなおしに至らしたのか、その肯定的側面に関する検討が疎かだったのではないかと。

また、反抗がないかあるいは軽度な青年が自立にいたるとき親側の要因（親の子育てに対する態度、子供の成長に合わせた親自身の変化、家族としての枠組みの再構成など）の作用にどのようなものがあるのかの検討が細くなされてこなかった。従来、反抗や葛藤を経ての自立という文脈は、その結果、自明のこととして親子関係は変化すると考えられる傾向があった。しかし、現実には、親子関係の結びなおしがうまくいかず、葛藤の結果、断絶が生じ、中年期になり親の介護の問題や看取りの問題が生じるころまでその葛藤がくすぶり続ける事例も存在する。そのような中で、親子関係の結びなおし、関係の再構築に至らせた要因についてはより注目していく必要がある。

2014年、日本発達心理学第25回大会のラウンドテーブル「思春期の親子葛藤を考える」においても、親子間の葛藤が持つネガティブな面、また、葛藤の強度や頻度だけ考えればいいのかという問題、親子間の葛藤にはプロセスが存在し、その中でネゴシエーションが行われること、また、葛藤は当事者で解決するか、第3者の介入により解決していることが指摘された。須崎（2009, 2011）においても葛藤は一時的であり、たいてい解決している。臨床的に見ても、親との対立の長期化は双方にとって良い結果をもたらさない。葛藤が存在しても、解決できる親子間の調整能力や葛藤のプロセス、解決に関わる、あるいは影響を与える何らかの第三者や社会的資源の影響などについて、より注目した研究が必要である。

3. 親子間葛藤研究に必要な視点

3-1. 世代性（ジェネラティヴィティ）という視点

家族関係について考察した酒井（1993）は、明治時代から1940年の半ばまでは、日本人の平均寿命は50歳を超えていないこと、その後、多産多死型から少なく産んで大事に育てる少産少死型へと移行していった状況を指摘している。この変化は、女性のライフサイクルで言えば、1940年当時女性は、平均して20歳で結婚し、第1子を23歳で出産し、35歳までに5人の子どもを産み終えている。したがって、当時の親子関係を年齢という観点でみると、母親は第5子（末子）が15歳のころに死んでいたことになる。つまり、父親も、母親も子育ての途中でなくなっていたことになる。しかし1990年以降、母親が55歳ころには末子が結婚し独立していくが、その前後に夫が定年を迎えることになる。核家族であれば、その後20年近くの人生は夫と妻が二人で過ごすことになった（酒井, 1993）。

このような平均寿命の伸長による変化は、単にライフサイクルの変化にとどまらず、親子関係自体にも変化をもたらした。平均寿命の伸長もあり、60歳を過ぎても、自分の親との親子関係が継続し、かつての青年は成人期・中年期に至ったとき親を介護し、看取るという経験をするようになった。

成人期の母娘関係について研究した水野・島谷（2002）によると、現在は、長命化により子育て後に従来よりも長い人生が可能になってきており、親が子に求めるニーズの内容は変化してきていることを指摘し、長命化が達成される以前に親から成人である子に対するニーズとされていたことは今やニーズたり得なくなっていると述べている。柏木・平山（2003）は特に女性について、ライフサイクル上の変化はこれまで母親役割を果たすことが時間的・心理的に大きな比重を占めてきた女性たちにも影響を与え、現在、母親役割を早々終えた中年期以降の女性たちの多くは、長い後半生に向けて、仕事、趣味、学習、地域での活動などに生きがいを見出し自分の世界を広げつつあると指摘している。

このような変化の中で酒井（1993）は従来、家族関係を心理的に検討していく場合、主として、親と子の関係に限って論じられてきたが、祖父母はその親子関係に直接・間接に関与しながら、孫の人格形成に影響を与えていることも看過できないことを指摘し、3世代家族に注目している。同時に井森・井上・大井・西村・斎藤（2006）が指摘したように近年の平均寿命の大幅な延長、ライフスタイルの変化等に伴い、家族の形が多様化したなかで今日の家族には家族の持つ養育、養護といった重要な機能の機能低下が指摘され、乳幼児期の子どもの養育養護と関連した「親と子」、中高年期の親の養護介護と関連した「親と子」を巡っては様々な問題が顕在化しつつある。

この中で、心理学においても、成人期・中年期に注目した研究がなされている。元来、中年期はエリクソンの理論においては、ジェネラティヴィティ（generativity）が発達課題となる。generativityは「生殖性」「世代性」「生成世代」などの訳語がある。2014年7月時点において、CiNiiで「世代性」で検索した場合、40件、「generativity」で検索した場合、98件だったが、いずれも大半が1990年代以降の論文であった。また、「生殖性」の場

合、生物学の論文がヒットすることが多かった。この結果からも見えるように、特に90年代以降、平均寿命の伸長や家族の形の多様化に伴い、成人期・中年期の親子関係や発達にも注目が集まり「generativity（世代性）」についても取り上げられることが増えた（以下 generativity については「世代性」で統一表記する）。この「世代性」について西平（2014）はエリクソンが世代と世代の関係という指摘をしたこと、中年期の発達課題である「世代性」とは、前世代から引き継ぐだけでなく、ジェネラティビティサイクルの中で、世代生成をすることであると述べている。

しかし、西平（2014）は世代生成が必ずしも、うまくいくとは限らないと指摘している。西平（2014）が述べたように世代間の葛藤が生じることもある。また、平均寿命が延びる中で新たに登場する、看取るものと看取られるものという役割が生じてきた。この中年期の「看取る」という役割については、介護などの問題もあり、社会的関心も高く、近年、「親をどう看取るか」は中年期の大きな課題にもなっている。鯨岡（2010）は一人の人間の生涯発達過程は、誕生から30年前後の「育てられる者の時代」、その後の30年前後の「育てる者の時代」、そして前の世代を「介護し看取るものの時代」を経て、「介護され看取られるものの時代」にたどり着いて人生の終末を迎えたと述べている。このように、近年、「世代性」の前世代からの引き継ぎ、それに関連した前世代を看取るという役割については社会的にも注目されてきた。この中で、西平（2014）が指摘したように、親という先行世代のために用いる労力と、子どもという後続世代に用いる労力のバランスを取ることが大きな問題になってきている。

同時に、中年期は「育てるもの」としての役割も担っている。親からの精神的自立の時期は、高学歴化、晩婚、非婚化が進む近年の先進国において特に遅延していると言われている（Frank, Pirsch, & Wright, 1990; Steinberg, 2005）。神谷（2008）は従来「青年心理学」のテキストでは、親からの心理的独立や分離という課題が、重要な課題として強調されてきたことについて触れている。そのうえで、児童期までとは違い、思春期・青年期は親への依存状態からいかに脱し自立していくかということが課題であることは間違いないが、一方で、現代では、就学期間が伸び、就職情勢や雇用情勢も停滞気味であり、経済的な面で親から独立し、自活することがますます難しくなっている（神谷, 2008）。そのため、当然のことだが、青年期は延長され、中年期の親が青年期の子どもと関わる期間も長くなっている。

親からの自立が課題となり、時には親に反抗し、親子関係の中で葛藤が生まれることは中年期の親にとってはどのような意味が在るのだろうか。西平（2014）は「世代性」の危機の一つの場面として「子離れ」をあげ、次世代（若者世代）と前世代（親世代）の先行世代から受け継いできた価値をめぐる対立が起こり、そのことが次世代（若者世代）にとってアイデンティティの危機として、前世代（親世代）にとっては「世代性」の危機として体験され、両者はかみ合っていると述べている。

丸島・渡辺・大石（1998）は親が中年期に達した時、青年期の子どもたちによって、自らの過去の青年期の葛藤を追体験させられたり、自らの人生やアイデンティティの再評価に迫られ、それは、何かいわれのない罰を受けているような気分に見られるよう

なものであるのではないかと述べている。中年期に達した親は、若い親であった頃、子どもとともに共生していた平和で甘美な関係から、分離し自立しようともがき、異質な価値にまみれて大きくなった子どもと拮抗しまたもに対峙しなければならない関係に変わったことを意識する。それは親にとって、“産み、保護する”というよりも“育み、世話をする”という異なった関わりに移行してきたことでもある（丸島ら, 1998）。丸島ら（1998）はエリクソンの「世代性」の概念に触れたうえで、中年期の親の心理社会的危機は青年期の子どもとの相互性があると述べ、親子の相互作用の中で変化や発達について言及した。親が子どもを育てる中で自分の子供のころを思い出し、逆に自分の親の気持ちを理解するということは、臨床的視点からは従来から指摘されてきた。

一ノ瀬（1999）は高校生の娘が自己の確立を探るなかで母親にも個としての自立を求め、母親もそれに応じることで自分を見つめなおして中年期の危機を乗り越えた事例などを通して思春期の母娘関係及び母親カウンセリングのあり方について、それぞれ研究を行っている。特に、親子の葛藤が増加する時期においては、親の側も自身の子どもころや親との関係について、回想する機会も増えるのではないだろうか。

また、子どもの自立に伴う葛藤は、親のアイデンティティとの関連も指摘されている。アイデンティティの形成は青年期の重要な課題であるが青年期で完結する課題とは言えない。アイデンティティ形成は青年期後期に本格化するが、成人期初期になってもアイデンティティを達成している人は半数以下にとどまることを示している（Kroger, 2000）。海外の研究の積み重ねからは、個人差はあるが、アイデンティティが青年期のみならず成人期にも、達成に向けて発達し続けることが明らかになっている。Thomas（1997）によると、子の巣立ちに伴う母親の心理的変化に関する研究は「空の巣症候群」の問題が米国で注目を集めた1960年代の終わりから1970年代にかけてはじめられた。研究がはじめられた当初は精神科の患者を対象としていたため、親役割からの解放は心理的な痛手になるとの見方が中心であった。しかし、一般成人に対象が広げられると、むしろ肯定的な事実が多数報告されるようになった。

日本では、清水（2004）が中年期の女性を対象に子の巣立ちと母親のアイデンティティとの関連を横断的に研究した結果、母親が子の巣立ちを主観的に認識することと関連して、母親のアイデンティティは発達に向かうことが確認された。清水（2004）は母親として積極的・肯定的な態度を強く持つことはアイデンティティの混乱と負の関係があったと述べている。また、清水（2001）の面接調査では母親側の娘の巣立ちに関しては、現在の娘の状態とその年頃の自分自身の想起とを照らし合わせながらその成長を認めようとする体験が語られた。このようにまさにアイデンティティの課題に直面している青年期の娘との同一視を通して、母親は自らのアイデンティティの再考を促されるのではないかと考えられる（清水, 2004）。

また、岡本（1994）は中年期女性の研究において、アイデンティティ達成の課題は青年期に限らず生涯を通して繰り返し再体制化されるものであること、中年期においてそれは心身の健康に寄与すること、また、親であることの役割に基づく中年期の発達課題

の達成はアイデンティティ達成と関係していることを指摘している。このような親子の共変関係については須崎（2011）の青年に対するインタビューにおいても、青年の側も親の変化に気づき、それに対して戸惑いや逆に肯定的な感情などを抱くことが語られている。セカンド・ライフという言葉が一般的になった現代では、親の側も、子の自立に伴い、自分の人生や今後の事を見直す機会としている側面もあるのではないだろうか。また、中年期においては、高齢になった親との関係や介護の関係の中で、再び、自分の親との関係が再燃する事例も存在する。

生涯にわたって、持続する親子のいくつかの節目における共変関係はどのようなものか、久世・平石（1992）はこうした研究はようやくその緒についたところであるという見解を示している。その中で、「世代性」についても研究が増加していくだろう。「世代性」は中年期の課題であるため、当然成人以上を対象にした研究が多い。そのため「世代性」という発達課題を抱え、「自分の親でありながら子として自分の祖父母の面倒も見ている」親の世代を青年がどう感じているのか、葛藤などを経て、親との関係が対等になりつつある青年が今後の親子関係や世代生成をどう考えているのかについて問題提起的なものも含めて研究は管見のかぎりない。この点も大きな課題なのではなかろうか。

鯨岡（2010）はわが子の様子に引き込まれて「自分にもこういうときがあったんだ」と同一化を向けた瞬間、私の思いを私の親もかつてしたに違いないと気づき、そこから「育てられる一育てる」という関係が同一化を挟んで、世代間で順繰りに循環していく事情が見えてくると述べている。池田・菱谷・高木・梁・落合（2011）は親に対する感謝が次世代育成力を育てるという心理的機制は、「世代間伝達の好循環」としてまとめられることが示唆し、青年の次世代育成力を育てる上では、青年が親に対する感謝を感じることができるのかかわることが、「世代間伝達の好循環」を促し有効であると述べている。

「世代性」が、前世代から引き継ぐだけでなくリニューアルすることで、新陳代謝を行い、世代生成をするであるという。それは人生の一時期で完結することではなく、様々な出来事や人間関係の中が関連しあい、相互作用的に生成されるものではないだろうか。「第二反抗期」が親を批判しつつ親も一人の人間であると感じ、いい面も悪い面も含めて受け入れていく一つの契機であるとするならば、ここで、「育てられるもの」だった自分が徐々にそれだけでなくっていくという点にも注目する必要がある。その転機の一つとして、長い人生の一時期としてのいわゆる「第二反抗期」の意義を捉えなおしてもよいのではないだろうか。

3-2. 社会・文化的視点

青年期は親からの自立が主要なテーマになり、その中で葛藤や親子関係の変化も研究されてきた。親子関係は青年期に限らず、心理学では研究がつけられてきた。では、社会の中ではどうだったのだろうか。

「親子関係」と言うキーワードで2014年4月に『朝日新聞』の記事（雑誌も含む）を検索した結果、1980年代まで親子関係に関する記事はほとんど見られない。1992年以降父親の役割、父との

子の関係など「父親」に関係した記事が増えた。これ以降、「父親」への注目、期待が見られるようになる。また、90年代以降、親子の問題は成人期以降の親子の問題に拡大していく。この傾向は、2000年以降も強まり、親子の確執の特集記事で介護の問題が取り上げられた。これ以降、老親との付き合いは度々紙面で取り上げられる。2011年以降は自立しない子供や子供の就職についての悩み、また母の娘としての苦悩や母親ロスなど再び母との関係に関する記事も見られる。

心理学の分野でも、90年代以降、大きな変化があった。3-1. で述べたように「世代性」についての研究が盛んになったのも90年代以降である。また、柏木ら（2003）は従来日本では夫婦研究の少なかったことと、1990年代以降日本でも夫婦関係に関する実証的研究がにわかに増加したことを指摘。この背景には、日本の結婚・夫婦関係を取り巻く次のような歴史的社会的状況の変化があると述べている。柏木ら（2003）は、青年期の心理的適応の問題を家庭環境と関連付けて議論する際、父親と母親それぞれの家族生活への関与の在り方や両者の適合性までを視野に入れる必要があることを示唆している。

また、父親研究も増加した。1999～2001年の父親研究の文献レビューを行った前田・内藤（2003）も、「父親の育児は母親への協力（「育児参加」）というパラダイムが乗り越えられ、母親と並ぶ『主な担い手』として研究対象とされるようになった」と述べている。1990年代以降の父親論の展開を追った中谷（1999）は、父性復権論が流行する一方で、乳幼児の世話を含めトータルに育児にかかわる父親をよしとする価値観が高まって、望ましい父親イメージが二極分化したと論じている。

高橋（1999）は、15年ぶりに改訂された Handbook of child psychology から、発達心理学の新しい方向性について生涯発達への関心と文化心理学の復興、実践と研究の結びつきであるとした。これらをまとめて社会の中で生涯発達を見ようとする姿勢の3点において示している。近藤（2000）はわが国では、母子研究と言えば乳幼児期の親和的な関係を扱うか、青年期の心理的離乳を扱うものであり、その点で、母子関係研究には生涯発達の視点が乏しかったことは否めず、成人期以降の母子関係の発達の变化を追求した研究はほとんどないことを指摘している。

しかし、社会的にも成人期以降の親子関係が注目されるようになり、特に母子関係については、心理学においても研究が盛んになりつつある。また、近年、ジェンダー的な視点も取り入れられた研究がおこなわれている。大石・松永（2008）によると、自立は社会的な文脈の中で形成されるものであることから、自立の過程には、社会や個人のジェンダー観が大きく影響していると述べている。日本では特に、母-娘関係の注目が集まることが多い。

また、青年期の自立については社会的影響以外にも、文化的影響を考慮する必要も指摘されている。心理的自立の構造を包括的に理解するためには、自立に関する文化差異の理解が必要と指摘されている（福島, 1993; Smetana, Campione-Barr, & Daddies, 2004）ことから、日本の文化社会の特徴を考慮することが必要である。齊藤環（2003）によると、親元から離れ独立する形を基本としたいわゆる欧米的な「個人の自立」は、日本においても表向きは尊重されているものの、親自身の必要のために子どもを親元

に引きとどめようとする傾向も見られ、日本の青年が求められる「自立」には「本音と建て前」的な二重構造があり、一貫性に欠けている。また欧米に比べ日本では「他者からのまなざし」への意識が高く、集団の中に融合された自己が特徴的である（梶田，1998）こともあり、個としての意見や価値観を持つことが強く求められる欧米諸国の自立の様相とは異なると考えられる。この点からも、文化・社会的状況を考慮した研究が必要である。

4. 親子間葛藤研究の今後

しかし、社会的・文化的影響を考慮した青年期の親子関係についての研究はまだそれほどなされてはいない。また、社会的影響については、近年、社会の動きが激しく、研究がそれについていけない面もある。逆に社会の親子関係の葛藤についての関心については、生涯を通じて親子の葛藤が生じる可能性や、親子関係の変化が起こりうることは理解されてきた。しかし、社会的にも逆に成人期以降の親子間の葛藤に注目が集まり、青年期の親子間の葛藤への関心は薄れているような印象を受ける。

一方で、「第二反抗期」という言葉は残り、反抗が自明のものとされている側面もある。ステレオタイプの親子間の葛藤としての「第二反抗期」がクローズアップされることで、それ以外の、表に出てこない反抗や、反抗を経ずに自立する道のりがあまり注目されない、あるいは排除されてきた傾向も存在した可能性がある。しかし、心理学の観点では、2. でも述べたように反抗や葛藤が必ずしも必要とされているとは限らないという「ずれ」が存在する。

「反抗がない」青年も青年期に親子関係の変化は経験している（白井，1997；須崎，2011）。青野（1997）は、従来の反抗期の捉え方がステレオタイプのだったのではないかと述べ、一つの物差しでは計れない様々な青年層が出現している今日では、反抗期の意味を問い直す作業が必要であることを指摘している。白井（2013）は先行研究を通じて、思春期の親子のコンフリクト（葛藤）は解消されるべきとは限らないという考えを踏まえたうえで、コンフリクト（葛藤）が青年の個人的アイデンティティに寄与する可能性を指摘しており、反抗や葛藤の意味そのものも多様化している可能性が存在する。

NHK 世論調査部（2010）による家族に関する調査では「よいと思う親子関係」については「仲の良い友達同士のような親子」「親しい先輩と後輩のような親子」を選択した人が9割を占める。2012年にNHK 世論調査部によって行われた「中学生・高校生の生活と意識調査」では父母に対し、「やさしくあたたい」「よくわかってくれる」「いろいろなことを話す」という人が過去30年で最多となった。親子の対立の種となる成績や勉強に関しても、最も多い中学生―母親の組み合わせでも「勉強や成績についてうるさく言う」が半数にとどまり、もはや青年期の良好な親子関係は自明のこととなりつつある。

このような状況では、従来の青年期の親子関係の考え方では親子関係についてとらえることができなくなる可能性がある。反抗や親子関係の葛藤についても、須崎（2011）で調査協力者の数人が述べたような「イメージ」と「現実」のかい離が起きている。

従来のような発想では反抗や葛藤の意味そのものを見失うことにもなりかねない。

従来の青年期に関する諸説は、社会的変化を踏まえた再検討が必要とされている。平均寿命が伸張り、社会が変化する中で、人生を通しての反抗や親との葛藤の意味が多様性を踏まえたうえで検討がなされることが、青年期の自立―「親離れ」―を考えるうえでも重要と考えられる。人生の一部分として、その後も続く親子関係の変化の一つの機会として、「第二反抗期」に代表される青年期の親子の間の葛藤を、もう一度見直すことは、親子関係に一般の関心も高まっている現在、意味があるだろう。

今後の研究の方向として、第1点は日本の社会・文化的背景を基盤に、青年期の親子関係の歴史的な変化に関する研究である。これには、社会的に流布している「第二反抗期」という言葉そのものを問い直すことが必要になってくるだろう。第2点として、世代性の視点から見たとき、青年期の親子の葛藤は互に新たな発達課題を生むであろう。親子双方にその後の人生にいかなる影響を与えるのか。ライフヒストリーをふまえた研究が求められる。第3に、それぞれの親子関係の中で状況や発達に応じて関係性を再構築する力があることがわかってきた。それを評価することが、今後臨床的視点からも必要になってくると考えられる。この3点を重視して青年期の研究において新たな知見を構築していくことが今後の心理学において必要ではないだろうか。

今後の研究としては、青年だけではなく親自身の親との葛藤と子供の自立をどのようにとらえたのかを含めた親子を対象とした研究や青年やその親に対しインタビューを行い、親子関係の葛藤とその後の回復について臨床的視点を踏まえた質的研究を行う必要がある。また、社会文化的視点を広げるうえで、フィールドワークやアクションリサーチによる研究を行い、社会的文脈を考慮した研究が今求められているのである。

引用文献

- 青野篤子（1997）. ジェンダーの観点から見た第二反抗期 心理学, 19, 1－8.
- 安達智子（2004）. 大学生のキャリア選択―その心理的背景と支援― 日本労働研究雑誌, 46（12）, 27－37.
- Bell, L.G. & Bell, D.C.（1982）. Family climate and role of the female adolescent; Determinants of adolescent functioning. Family relations. *Journal of Applied Family & Child Studies*, 31（4）, 519-527.
- ブロス, P. 野沢栄治（訳）（1971）. 青年期の精神医学 誠信書房 (Blos, P. 1962 On adolescence: A Psychoanalytic Interpretation. New York: Free Press.)
- Cowan, C.P., Cowan, P.A., Heming, G., & Miller, N.B.（1991）. Becoming a family: Marriage, parenting, and child development. In P.A.Cowan, & M.Hetherington (Eds), *Family transitions* (pp.79-109). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 遠藤由美（2000）. コンパクト新心理学ライブラリ10 青年の心理―揺れ動く時代を生きる― 株式会社サイエンス社
- Frank S, J., Pirsch, L. A., & Wright, V.C.（1990）. Late ado-

- lescent' perceptions of their relationships with their parents: Relationships among deidealization, autonomy, relatedness, and insecurity and implications for adolescent adjustment and ego identity status. *Journal of Youth and Adolescence*, **19**, 571-588.
- 福島朋子 (1993). 自立に関する概念的考察: 青年・成人及び女性を中心として 発達研究: 発達科学研究教育センター紀要, **9**, 73-85.
- 平石賢二 (2000). 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する事例研究 名古屋大学大学院発達科学研究科紀要心理発達科学, **47**, 281-299.
- 乾孝 (1977). 新版 児童心理学 新評論
- 一ノ瀬節子 (1999). 中学生の母親カウンセリング 教育と医学, **47** (5), 43-49.
- 池田幸恭・菱谷純子・高木有子・梁明玉・落合幸子 (2011). 親に対する感謝が青年期の次世代育成力を育てるという心理的機制的検討 茨城県立医療大学紀要, **16**, 43-52.
- 井森澄江・井上俊哉・大井京子・西村純一・斎藤こずゑ (2006). 親子関係の生涯発達心理学研究 I: 家族構造の世代差 東京家政大学研究紀要 (1) 人文社会科学, **46**, 237-244.
- 加藤隆勝 (1987). 青年期の意識構造—その変化と多様性 誠信書房
- 神谷栄治 (2008). 青年期の臨床心理学 永井監修 ライフサイクルの臨床心理学シリーズ 2 思春期・青年期の臨床心理学 培風館 pp.91-106.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 夫婦関係 日本児童研究所 (編) 児童心理の進歩, **42**, 金子書房 pp.85-118.
- 河野貴代美 (1995). フェミニスト・カウンセリング 柏木恵子・高橋恵子 (編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 pp.223-246.
- 梶田叔一 (1998). 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 小高恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, **46** (1), 333-342.
- 小高恵 (2000). 親—青年関係尺度の作成の試み 南大阪大学紀要, **3**, 87-96.
- 小高恵 (2008). 青年の親への態度についての発達の变化—心理的離乳過程のモデルの提案—太成学院大学紀要, **10**, 31-48.
- 木下清・島田修・保野孝弘・網島啓司 (1997). 大学生の精神健康調査 川島医療福祉学会誌, **7** (1), 91-101.
- 木村栄・馬場謙一 (1988). 母子癒着—母を拒み, 母を求めて 有斐閣
- 近藤清美 (2000). 母子関係 日本児童研究所 (編) 児童心理の進歩, **39**, 金子書房 pp.149-174.
- Kroger, J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA: Stage. 榎本博明 (翻訳) 2005 アイデンティティの発達—青年期から成人期 北大路書房
- 鯨岡峻 (2010). 〈育てられる者〉から〈育てる者〉への世代間伝承を考える 2009 人間関係研究, **9**, 129-161.
- 久世敏雄・平石賢二 (1992). 青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学紀要 教育心理学科, **39**, 77-88.
- 前田由美子・内藤和美 (2003). 男性の子育てとその社会的保障に関する研究—第1報: 1999年以降の父親研究の動向 群馬県教育学短期大学紀要, **5** (1), 75-184.
- 丸島令子・渡辺厚子・大石美佳 (1998). 中年期の父親, 母親と青年期の娘—親の性役割タイプと相互性について— 女性学評論, **12**, 21-44.
- 松井豊 (1996). 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斉藤誠一 (編) 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館 pp.19-54.
- 松元泰儀 (1996). 人間関係のつまずきと病理 斉藤誠一 (編) 人間関係の発達心理 4 青年期の人間関係 培風館 pp.135-167.
- 宮下一博 (1996). 人間関係の発達と対人的関係 斉藤誠一 (編) 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館 pp.109-134.
- 水野—島谷いずみ (2002). 日本における成人期の母娘関係の概念枠組みと測定尺度—都市在住の女性を対象にした分析— 社会心理学研究, **18** (1), 25-38.
- 村瀬孝雄 (1976). 青年期危機概念をめぐる実証的考察 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年の精神病理 第1巻 弘文堂 pp.29-52.
- 中谷文美 (1999). 「子育てする男」としての父親?—90年代日本の父親像と性別役割分業 西川裕子・萩野美穂 (編) 共同研究男性論 人文書院 pp.46-73.
- NHK 世論調査部 (1984). 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会
- NHK 世論調査部 (2004). 大人になりたくない中高生の親子関係—「中学生・高校生の生活と意識」調査から— 放送研究と調査 11月号 日本放送出版協会
- NHK 世論調査部 (2010). 家族の中の“すれ違い”—「家族に関する世論調査」から— 放送研究と調査 7月号 日本放送出版協会
- 西平直 (2014). エリクソンは発達の「環境」をどう描いたのか 鈴木忠・西平直 生涯発達とライフサイクル 東京大学出版会 pp.103-155.
- Noom, M.J. (1999). *Adolescent autonomy: Characteristics and correlates*. Netherlands: Eburon Publishers.
- Offer, D. (1969). *The psychological world of the teenager: A study of normal adolescent boy*. New York: Basic Books.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成— 日本家政学会誌, **59** (7), 461-469.
- 岡本裕子 (1994). 成人期における自我同一性の発生過程とその要因 風間書房
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44** (1), 11-22.
- 小沢一仁 (1991). 親への反抗と青年期の心理的離乳 帝京学園短期大学研究紀要, **4**, 47-55.
- 小沢一仁 (1998). 親への反抗 落合良行 (編) 中学二年生の心理

- 大日本図書 pp.97-133.
- Papini,D.R., & Sebby,R.A. (1987). Adolescent pubertal status and affective family relationship: A multivariate assessment. *Journal of youth and adolescence*,16,1.
- 酒井亮爾 (1993). 家族関係における一考察—核家族と3世代家族を中心に— 愛知学院大学人間文化研究所紀要, **8**, 108-91.
- 桜井茂雄 (2000). 子どもとの関係を変えていける親—誕生から思春期までの発達にそって— 児童心理, **54** (9), 12-19.
- 斉藤学 (2004). インナーマザー—あなたを責めつづけるこころの中の「お母さん」— 新談社
- 斉藤環 (2003). ひきこもり文化論 紀伊國屋書店
- 関崎一 (1996). 青年期人間関係の現代的課題 斉藤誠一 (編) 人間関係の発達心理4 青年期の人間関係 培風館 pp.169-190.
- 柴田利男 (2000). 青年期の対人関係 青年期以降の発達心理学—自分らしく生き、老いるために— 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿 (編) 北大路書房 pp.56-74.
- 清水紀子 (2001). 「しなやかなアイデンティティ」定義に向けての試論—「語り」による、子の巣立ち体験から— 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, **1**, 19-35.
- 清水紀子 (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ 発達心理学研究, **15**, 52-64.
- 白井利明 (1997). 青年心理学の観点から見た「第二反抗期」 心理科学, **19** (1), 9-24.
- 白井利明 (2013). 親子のコンフリクトによる個人的アイデンティティの構築 自主シンポジウム思春期の親子関係—第2反抗期再考— 日本発達心理学第24回大会論文集 会員企画 自主シンポジウム・ラウンドテーブル p.4.
- Smetana,J.G., Campione-Barr,N., & Daddies,C. (2004). Longitudinal development of family decision making: Healthy behavioral autonomy for middle-class African American adolescents. *Child Development*, 75, 1418-1434
- Steinberg,L. (2005). Cognitive and affective development in adolescence. *Trends in Cognitive Sciences*, **9** (2), 69-74.
- Steinberg, L., & Silverberg,S (1986). The vicissitudes of autonomy in early adolescence. *Child Development*, **57**, 841-851.
- Sullivan,K., & Sullivan,A. (1980). Adolescent parent separation. *Developmental Psychology*, **16**, 93-99.
- 住田正樹 (1995). 反抗しなくなった子どもたち 児童心理, **49** (2), 200-205.
- 須崎暁世 (2009). 現代の青年における第二反抗期—反抗が第二の分離個体化に及ぼした影響を中心に— 神戸大学発達科学部2008年度卒業論文 (未公開)
- 須崎暁世 (2011). 現代の青年における第二反抗期—反抗が親子関係に与えた影響を中心に— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2010年度修士論文 (未公開)
- 高橋恵子 (1999). 発達研究の現在—社会=情動分野の進歩— 日本児童研究所 (編) 児童心理の進歩 **38**. 金子書房 pp.1-28.
- 滝沢洋司 (2000). 子どもが熱中していることを応援する 児童心理, **54** (9), 98-100.
- Thomas,S,P. (1997) Psychosocial correlates of women's self-rated physical health in middle adulthood. In M.E. Lachman, & J.B. James (Eds.), *Multiple paths of midlife development* (pp.257-291). Chicago: The University of Chicago Press.
- 山岸明子 (2009). 成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連、及びその規定要因 青年心理学研究, **21**, 53-68.
- 吉澤良保 (2000). 進路や人生について一緒に考える 児童心理, **54** (9), 104-106.
- 吉田弘道 (1993). 反抗期 加藤正明 (編集代表) 新版 精神医学事典 弘文堂 pp.654-655.
- 渡邊賢二 (2014). 思春期の親子葛藤と養育態度のとの関連 日本発達心理学第25回大会 ラウンドテーブル 思春期の親子葛藤を考える 配布資料

引用 URL

- NHK 放送文化研究所 「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」の結果
http://www.nhk.or.jp/bunken/research/category/yoron/page_02.html

参考文献

- 朝日新聞の記事検索 (2014年4月)
- 日本発達心理学会監修 (2013). 発達心理学辞典 丸善出版株式会社
- 日本発達心理学会第24回大会委員会 (2013). 日本発達心理学第24回大会論文集 自主シンポジウム思春期の親子関係—第2反抗期再考—
- 山本多喜二監修 (1991). 発達心理学用語辞典 1991 北大路書房